

<研究テーマ>

自分のよさや可能性に気付く 保育の在り方を探る

研究テーマの設定

前テーマの研究である「遊びに生きる子どもを育む～遊びの育ちを追いながら～」では、幼児の遊びの姿や幼児の思いを教師が丁寧に捉えながら援助や環境構成を行うことを通して、「遊び」や「子ども」の育ちを支えていくこと、また、幼児一人一人の「育ち」を保障することが、「遊びに生きる子どもを育む」ことにつながると見出しました。

この研究の成果をもとにしながら、幼児の遊びの姿や幼児の育ちを捉え、日々の保育を振り返る中で、私たち教師は、幼児一人一人が自信をもって生活していくことの必要性を感じました。そして、幼児一人一人が「自分のよさや可能性に気付く」ことが、自信をもって生活する姿につながるのではないかと考えたことから、研究テーマを設定しました。

研究の目的

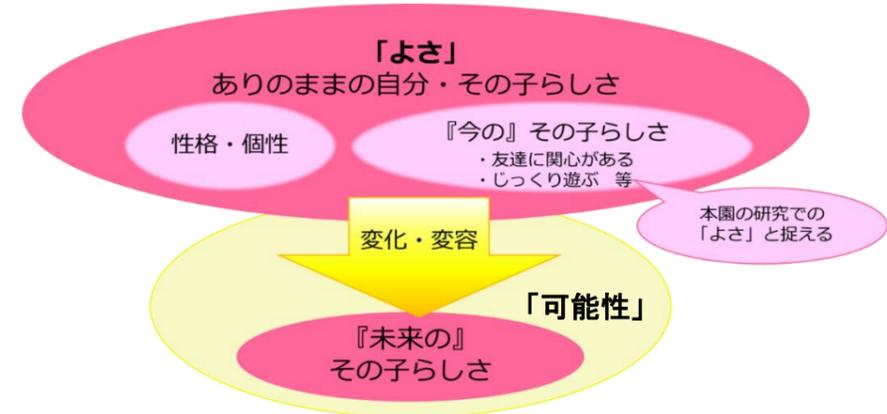
- 教師が、幼児一人一人のよさや可能性、幼児自身が自分のよさや可能性に気付く姿を見取り、その要因を探る
- 自分のよさや可能性に気付く保育の在り方を探る

研究の計画

- 1年次 **○幼児一人一人のよさや可能性を見取る**
- ・テーマについての共通理解
 - ・幼児一人一人のよさや可能性を保育の中で探る
 - ・幼児一人一人のよさや可能性が育まれるための要因を探る
 - ・幼児一人一人のよさや可能性を見取るための記録の在り方を探る
- 2年次 **○自分のよさや可能性に気付く姿を見取る**
- ・幼児一人一人のよさや可能性に気付く姿を保育の中で探る
 - ・自分のよさや可能性に気付くための要因を探る
 - ・自分のよさや可能性に気付く姿を見取るための記録の在り方を探る
- 3年次 **○自分のよさや可能性に気付く保育の在り方を探る**
- ・自分のよさや可能性に気付く姿を支える教師の援助や環境構成を探る

1年次の研究の取り組み

- 「幼児一人一人のよさや可能性」を見取る

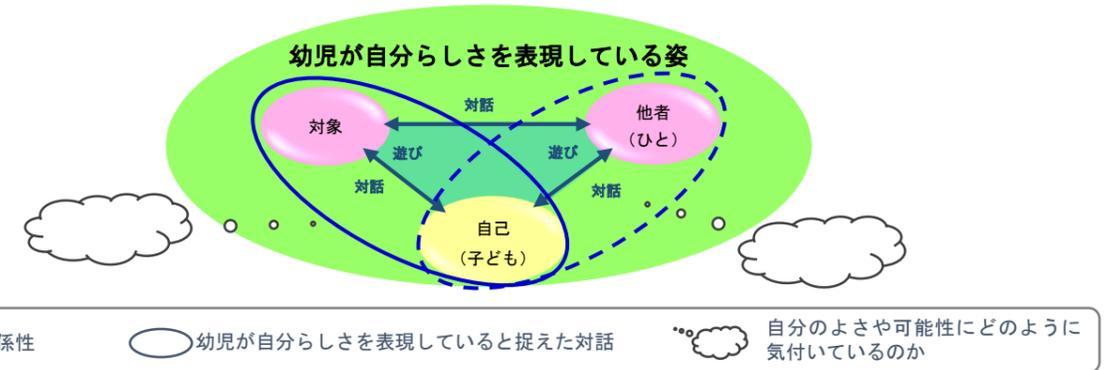


教師が幼児のありのままの姿・その子らしさを捉える時、「優しい」、「ポジティブ」など性格や個性と表現できるその子らしさと、「友達存在に関心をもっている」「砂場で型抜きを使ってごちそうをつくることを繰り返し楽しんでいる」などの今の実態から見られるその子らしさがあり、そのどちらも「よさ」と捉えられようと考えました。本研究では、今のその幼児の実態から見られるその子らしさを「よさ」として捉え、見取ることにしました。また、園生活の中で、実態としてのその子らしさは変化・変容していくと考えます。今のその子らしさが変化・変容し、未来のその子らしさにつながっていくことを「可能性」として定義しました。

幼児それぞれの「よさ」を継続的に見取り、記録し、支えていくことで、一人一人の姿を多面的に捉えることができ、また、一人一人の「よさ」の変化・変容に気付くことができました。

2年次の研究の取り組み

- 「自分のよさや可能性に気付く姿」を見取る



「よさや可能性に気付く」姿とは、「幼児が自分らしさ(ありのままの自分)を表現する」姿と本研究では捉えました。この「自分らしさを表現する」とは、意図的に自分を表現する姿だけではなく、没頭して遊ぶ時の表情や仕草、幼児からかもし出される雰囲気などを手掛かりに教師が捉えた姿も含まれます。幼児が日々の遊びの中で対象や他者との対話を繰り返し、対話を広げたり深めたり、他者が対話する姿を通しての新たな気づきを得たり、様々な「対話」の中に「自分らしさを表現する」姿が表れると考えました。また、「気持ちいい」「先生の傍にいと安心する」など、対象や他者(ひと)との対話の中で「感じる」ことや、「〇〇っておもしろい」「□□ちゃんと一緒にいたら何だか楽しいな」と、対話の中で今の自分の内面や状態を「感じ取る」ことの積み重ねの先に「気付く」姿が表れるのではないかと考えました。

幼児が表現する「自分らしさ(ありのままの姿)」を継続的に、また、様々な場面を通して見取り、記録していきました。そして、特徴的な事例を上記の図に当てはめ、それぞれの関係性や、対話の内容などを整理しました。記録や、図を用いた事例検討を通して、「対話」の中で「感じる・感じ取る」ことを積み重ねていくことが「自分のよさや可能性に気付く姿」につながっていくということが明らかになりました。

3年次の研究の取り組み

3年次の研究の進め方について考えよう

- 昨年度の実践事例で捉えた
幼児の姿から考察しよう
- 幼児のありのままの姿を
捉えて保育を実践しよう
- 幼児が対話をする中で
「自分のよさや可能性に
気付いた姿」について
みんなで語り合おう

「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える 教師の援助と環境構成に視点を置いて

- 幼児が「自分のよさ
や可能性に気付く」
要因を探ろう
- 「教師の援助と環境構成」の
教育課程とのつながりは？
- 「気付く姿」を支えることを
積み重ねることで、その幼児
に何が育まれるのだろうか…？



日々の記録

- 遊びや生活の中で幼児の対話する姿を記録する。
- その遊びや生活の中で、幼児の「よさや可能性に気付く姿」と捉えた姿を記録する。
- 幼児の姿を支える教師の援助と環境構成について記録し、考察する。

園内研修会

- 幼児のありのままの姿を捉え、保育指導案を作成し、実践する。
- 他学年の保育を見合い、複数の教師が一人の幼児の姿を追い、遊びや生活の中でのその幼児の「よさや可能性に気付く姿」を探る。
- 保育後、幼児の姿を支えた教師の援助と環境構成について話し合う。
- 大学の先生方に保育を見ていただいたり、研究の取り組みを聞いていただいたりして、様々な視点からの意見をもとに研究を深める。

実践事例検討

- 幼児が遊びや生活の中で対話していると捉えた実践事例を持ち寄り、検討する。
- 「気付く姿」を見取り、その姿を支える教師の援助と環境構成について考察する。
- 変化・変容しているところを探る。

保育実践

保育の話し合い

- 幼児の姿や遊びの様子、教師の思いや悩みなどを語り合う機会をもつ。
- 具体的な幼児の姿を話し合い、対象や他者と対話をしている姿について共有したり、様々な視点から幼児がよさや可能性に気付く姿を見取ったりする。またその姿を支える教師の援助と環境構成について意見交換する。

「気付く姿」からの考察

- 昨年度の実践事例から幼児の姿を支えた教師の援助と環境構成についてまとめ、考察する。
- 「教師の援助と環境構成」の教育課程とのつながりを考察する。
- 「よさや可能性に気付く姿」を支えることを積み重ねることで、幼児のどのような姿や力が育まれたか、捉える。

研究の内容

昨年の実践からの考察

自分のよさや可能性に気付く姿 (実践事例より)	3歳児	4歳児	5歳児
1. 大好きなものを一心懸命に遊ぶ。愛着を感じている。	・新しい道具や環境にかかると好奇心を感じ取っている。	・教師がそばにいて安心感を持っている。	・教師の援助と環境構成が安心感につながっている。
2. 自分なりにこだわったり、工夫したりして遊ぶ姿を見取っている。	・好きな遊びを見つけて遊ぶ姿を見取っている。	・自分の思いを素直に表現できる安心感を持っている。	・好きなものからイメージした遊びが楽しい。
3. 自分と友達との遊びのやりかたを、違うところを感じ取っている。	・好きな遊びを見つけて遊ぶ姿を見取っている。	・自分の思いを素直に表現できる安心感を持っている。	・好きなものからイメージした遊びが楽しい。
4. こだわりをもって遊ぶ姿を見取っている。	・好きな遊びを見つけて遊ぶ姿を見取っている。	・自分の思いを素直に表現できる安心感を持っている。	・好きなものからイメージした遊びが楽しい。
5. 自分と友達との遊びのやりかたを、違うところを感じ取っている。	・好きな遊びを見つけて遊ぶ姿を見取っている。	・自分の思いを素直に表現できる安心感を持っている。	・好きなものからイメージした遊びが楽しい。

「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える要因

- 教師の援助と環境構成
- その時まで積み上げてきた援助
- 友達とのかかわり

3歳児 自分のよさや可能性に気付く姿につながる教師の援助と環境構成(実践事例より)

教師の援助、環境構成で友達の関わり

- 積み重ねてきた援助
- 教師の援助、環境構成で友達の関わり
- 教師の援助、環境構成で友達の関わり
- 教師の援助、環境構成で友達の関わり

昨年度の実践事例を考察していく中で、「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える要因を探りました。対象児を継続して捉える中では、気付く姿につながった教師の援助と環境構成を考察しました。事例を考察していくことで、教師が幼児の育ちを願って、その時まで積み上げてきた援助も気付く姿を支える要因ではないかと捉えました。また、一緒に遊ぶ友達や楽しそうに遊んでいる友達の様子など、友達の存在も要因であると考えました。

昨年度集積した実践事例をもとに、対象児のありのままの姿、その姿を受けておこなった教師の援助と環境構成、幼児の育ちを願って積み上げてきた援助、友達の存在など、気付く姿を支える要因となり得る要素を一つの表にまとめました。

園内研修会



園内研修会にて、複数の教師で幼児を読み取る様子

今年度も学年毎の園内研修会を行いました。幼児のありのままの姿を捉えて実践した保育や、教師の援助と環境構成が、幼児のよさや可能性に気付く姿を支える要因になることを明らかにするために、新年度間もない5月に園内研修会を実施しました。本研究では、クラス毎に対象児を決めて、継続的に姿を捉えています。園内研修会では、複数の教師で対象児が対話していると思われる姿を読み取り、考察しました。対話を読み取る視点が広がったり、より深い幼児の読み取りにつながったりしました。

日々の記録

今年度は週日案に、本園の教育課程や指導計画が載っている「保育の手帳」の中の「期別による保育のねらい・かもしだす雰囲気」を明記するようにしました。記録には、教師が読み取った対話をしている姿から、幼児がどのようなよさや可能性に気付いているのかを考察しました。また、その気付く姿を支えるための教師の援助と環境構成には▲をつけて明記するようにしました。

遊び・生活・対話について	1月 22日 (水)	1月 23日 (木)	1月 24日 (金)	1月 25日 (土)
1日 (水)	1月 22日 (水)	1月 23日 (木)	1月 24日 (金)	1月 25日 (土)
「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」
「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」
「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」
「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」	「たけのこ」

▲遊び同士がつながる楽しさを感じる機会になるように、ホテルで飯を食べることに、別で遊んでいるこはん屋さんに頼むことを提案する。

・「し・ゆ」「いいですよ！待ってて」と手早く砂場道具に砂を詰めてごちそうをつくる。教師「重く屋さんだし、スクーターで持ってくる？」し・ゆ「それならお母さんに頼む！」し・ゆは三輪車に乗って遊んでいたが、し・ゆに声を掛けられると、嬉しそうに、後ろにつないだ台車に乗せやすいよう、三輪車の向きを変える。

・(友達から頼りにされたことに喜びを感じている)

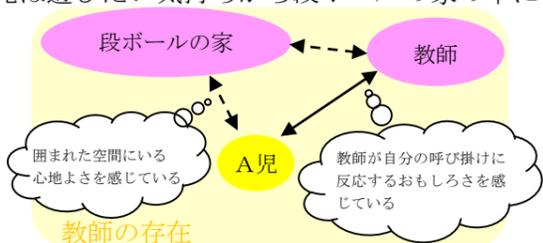
▲顔を見合わせて食べることを楽しむように、机やベンチをホテルごっこの近くに運ぶ。

▲…気付く姿につながる教師の援助と環境構成

- …幼児の姿
- …幼児のよさや可能性
- …自分のよさや可能性に気付く姿

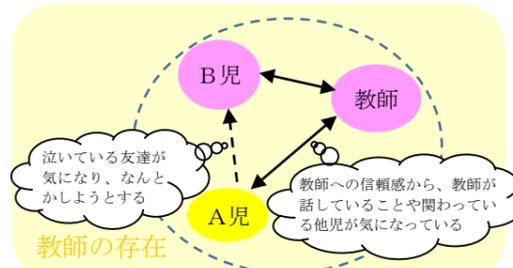
4月18日

A児は登園してくると、制服を着たまま大きな段ボールでつくった家に入り、いろいろな方向の窓から外を覗いて遊び始める。窓から顔を出すと教師(以下T)の姿が見えることに気付き、「先生ー！おい」と呼び掛ける。Tが応えると、笑って違う方向の窓からも覗き込んでTを見ながら呼び掛ける。Tは何度か繰り返しやりとりをしながら身支度に誘うが、A児は遊びたい気持ちから段ボールの家の中に居続ける。身支度の場にいる人数が減ってきた頃に、Tが再び身支度をするよう声を掛けると、笑ってまた窓からTに呼び掛ける。また何度かやりとりをしつつ、Tが他児と遊びながらA児の傍へ行き、一緒に制服をしまいにしようとして誘い掛けると、Tの手をつないで身支度に向かう。



5月14日

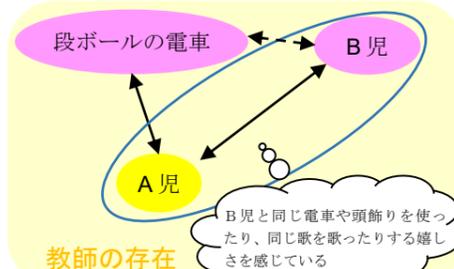
泣いて登園してきたB児にTが関わっていると、A児が登園してくる。B児が泣いていることに気付き、「泣いてんの？」とTに聞く。Tが「そうなの。Bちゃん、ちょっと悲しくなっちゃったみたい」と言うと、「Bちゃん悲しくなっちゃったん」と言いながらB児の顔を覗き込む。B児が驚いたようにTを見るので、「Bちゃん泣いてるな、って来てくれたんだって」と伝える。A児はTに「Aちゃんはバイバイできた」と言う。Tが「そうだね」と応えると、A児はB児に「お靴、履くの？」と言いながら上靴をB児の足元に置くと、「Aちゃんが置いてあげてん」とTに言う。Tが頷くと満足したような表情で身支度の続きに向かうが、少しするとTの傍に戻ってくる。Tが、前日に「アイス固まるかな」と置いておいたどろんこのカップを知らせると、A児は靴を履き終えたB児の手を引いて、2人で見に行く。しゃがみこんで固まったどろんこを見たり、触ったりし、また手をつなぎながら身支度に戻ってくる。歩きながらA児はB児の顔を覗き込んで、「楽しかったねえ」「楽しかった？」と話し掛ける。B児は返事を返すわけではないが、登園時より明るい表情で、A児と一緒に身支度をした。その日の降園時には、A児がB児を誘い、隣の席に座って一緒に一冊の絵本を見る姿が見られた。



6月19日

A児を含めた数名が、保育室に置いてあった段ボール箱を電車に見立てて入って遊んでいるが、箱に積み木を積んで押してみたり、自分が中に入って遊んだりする中で、一人の幼児が「この電車、動かない」と言い始める。そこで、箱の底をくり抜いて持ち手を付けた電車を保育室に用意すると、A児もその電車に気付き、遊び始める。B児も一緒に電車を取りに行き、自分の電車を選んで乗る。最初は箱の中に入ってしゃがむことで嬉しそうにするが、少しすると誰からともなく「ガッタン、ゴットン」と言いながら歩き始めた。A児が「♪きしゃ、きしゃ、ぽっぽぽ〜」と、『のりもの』の歌を口ずさみながら歩き始めたので、Tも一緒に口ずさむと、B児も後に続き、一緒に歌いながら保育室やテラスを電車に乗って歩いた。

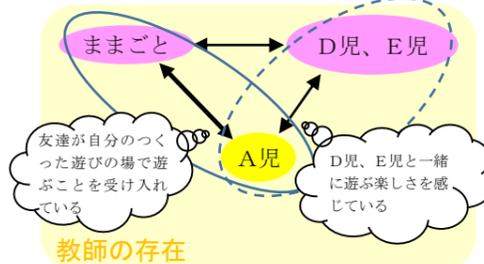
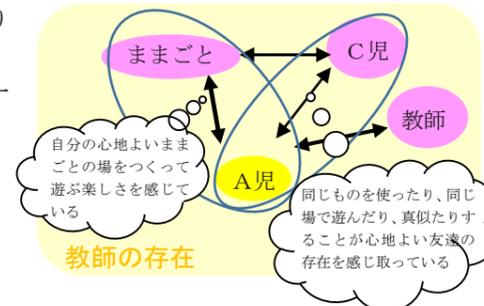
この電車を使つての遊びは、自分たちで電車にシールを貼って飾ったり、Tの手づくりの信号機を遊びに取り入れたりしながら、学期末まで続いた。時には、ままごとの場にある頭飾りをB児が取りに行き身に着けたことを真似てA児も身に着けたり、B児の後ろを並んで追いかけたりしながら遊んだ。



12月6日

A児はC児と2人で一緒に身支度を進めながら、一つ一つTに知らせる。最後に「あのね、Aちゃんね、Cちゃんと遊ぶねん」と言うと園庭に出る。2人で木製のボウルにクスノキの実を集めるが、クスノキの近くに用意してあった戸外用のままごとの遊具を、他児が使っていることを見て、砂場で遊び始める。少ししてままごとの遊具がある場にいた幼児が離れたことに気付くと、砂場で使っていたバケツとフライパンを一人一つずつ手に取り、狭い円形の場へ持って行き、レンガの囲いの上に並べる。一通り並べ終わると、「足りなーい」と言ってスプーンやボウル、追加のバケツなどを運び入れる。2人で「ジュージュー」と言いながら、それぞれのフライパンに入れたごちそうに見立てた砂や落ち葉を炒めたり、バケツを鍋に見立ててかき混ぜながら「スープやんなあ」「うん、スープやなあ」とやりとりをしたりする。Tが「AちゃんとCちゃんのいるところから、なんだかおいしそうな匂いがしてきた」と言って近づくと、「スープです」「スープです」「熱いねん。あちってなるねん。食べて」と言ってTにお皿を差し出す。Tが熱そうに食べるふりをすると2人は笑い、A児が「フーってしたらいいやんなあ」と冷ますようにスープに息を吹きかける。Tが「ありがとう、冷めましたか？」と聞くと、C児が「まだでーす！もっとでーす！」と言い、A児も「もっとでーす！」と真似る。

3人でスープに息を吹きかけて冷ましていると、そこにD児がやってきて「何してるん」とTに尋ねる。「AちゃんとCちゃんがつくってくれたスープが熱いから、冷ましてるの」と応えると、「Dもスープしたい」と言って場に入り、バケツの中の砂をかき混ぜ始める。C児は「Cちゃんお買い物に行ってくる」と言ってその場を離れる。少しの間A児とD児が2人で同じ場でごちそうをつくっており、E児も加わると、A、D児がE児に遊び方を知らせるような姿も見られた。



「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える教師の援助と環境構成

- ・幼稚園で安心して過ごせるように、囲まれた空間や身近な遊具などを用意する。
- ・教師に自分を出せるように、一緒に遊んだり、思いを表現した時に丁寧に受け止めたりなどの関わりを積み重ね、信頼関係を築く。
- ・幼児がその時に何を楽しいと感じているか読み取り、楽しさを存分に味わえるように教師も一緒に楽しむ姿を見せたり、気持ちに共感したりする。
- ・他児に関心をもった際に関わりを楽しいと思えるよう、同じ遊具を十分な数用意したり、時間や空間を保障する。
- ・感じたことを受け止めたり一緒に遊びながら言語化したりして、友達と過ごす楽しさを味わえるようにする。

「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える保育の中で育まれた姿



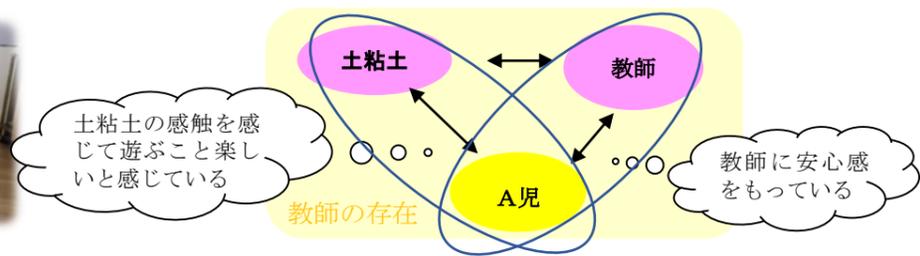
<考察>

幼稚園で安心して過ごせるように環境を整え、思いを受け止めたり一緒に遊んだりしながら信頼関係を築いたことで、幼稚園で存分にしたいことを楽しむ姿が見られた。A児の生活が安定していくと、少しずつ近くにいる友達の存在に気付き、一緒に過ごすことに心地よさを感じる姿が見られるようになった。最初は教師の存在から友達の存在に気付き、関心をもったので、様々な場面で「一緒」であることを楽しめるように、遊具の数や友達と一緒に過ごす時間、空間を保障した。次第に教師の仲介がなくても友達と過ごす姿が増え、友達と過ごす楽しさを感じ取るようになった。また、自分たちで遊具を揃えたり、空間をつくったりするなど、積極的に友達と一緒に過ごそうとする姿へと変化・変容していったと捉えた。

6月18日

「今日は、粘土するねん」と、A児は登園時に靴箱の前でTに会うとすぐに話す。自分のやりたいことを見つけているA児の思いを後押ししようと「昨日も、言ってたものね。しよう。しよう」と、Tは応える。A児は、身支度が終わるとすぐにテラスの土粘土の場に行き、小さな塊を手の中で握ったり、ちぎったりして遊び始める。「見て！こんな形になった」「これは、柔らかいな」「冷たいよ」と、Tに話しながら遊んでいる。Tは、その都度、A児の思いに共感したり驚いたりする。

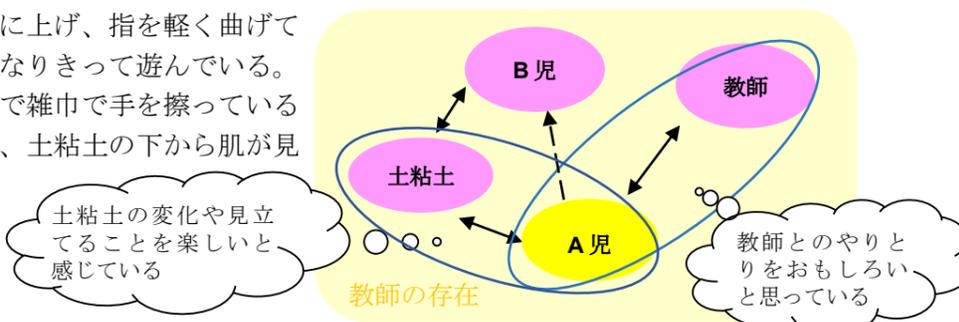
食後、涼しい場で遊べるようにと土粘土の場を室内に用意すると、A児はゆっくりと弁当を食べていたが、「Aもやりたい」と興味を示す。「早く弁当を食べて、おいでよ」とTが声を掛けると「分かった」と急いで食べ終え、「来たよ」とTに声を掛けて、午前中のように遊ぶ。



9月6日

A児は、朝の身支度を終わるとすぐに「粘土、したい」とやって来る。一緒に準備をしていると、シートの中から乾いた粘土の塊が出てきて、A児は「ビスケットだ！」と集める。Tが箱から土粘土を出すと「これはちょっと固いな」とA児は言って、自分でちぎって手の中で丸くする。Tが更に出していくと「これはどうかな？」と一つずつ触っていく。柔らかい土粘土を触り、手に付くと、「クリームだ！」と手のひらに塗っていく。「クリームだらけ」と笑顔でTに手のひらを見せる。「Aくんの手が見えなくなっちゃったね」とTが応えると、笑ってどんどん手の甲にも塗っていく。B児が「見て！」とA児を真似て手のひらをTに見せると、その様子を見て笑顔を見せる。手の甲にも全面塗るとA児は「手袋になった」とTに見せる。Tは「ほんとだ、手袋だ」と言うと、A児は「手袋したままお家に帰ったら、お母さんどうするかな？」と応える。Tが「『暑いのにもう手袋してるの？』ってびっくりするんじゃない？」と言うと、A児は「ハハハ、この手袋、冷たいよ」と笑う。Tが「じゃあ、素敵な手袋、お母さんもほしいなって言うんじゃない？」と言うと、「ハハハハハ」と笑った後、どんどん腕にも塗っていく。手の甲の粘土が乾いてきてひび割れてくると、A児は「見て！こんなになった！」とTに見せる。「わあ、ツルツルの手袋が、ツルツルじゃなくなった！」とTが応えると、A児は「なんでかな？」と言う。Tが「なんでだろう？」と返すと、しばらく自分の手を見つめた後、「A、ガオーになっちゃった！」と、両手を胸の前に上げ、指を軽く曲げてポーズをとり、しばらくなりきって遊んでいる。

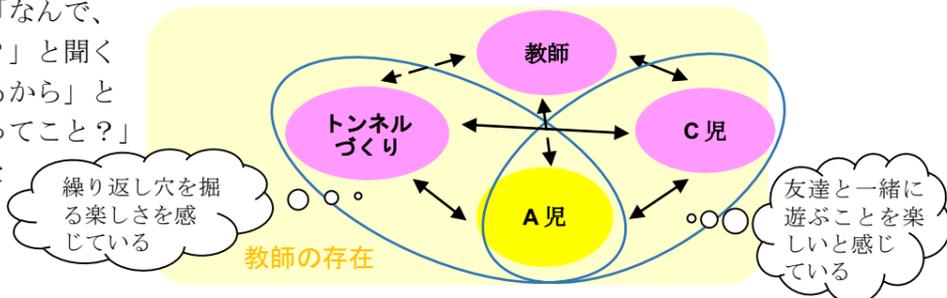
水を溜めたタライの中で雑巾で手を擦っていると、雫がA児の腕に飛び、土粘土の下から肌が見える。A児は「わあ、粘土が溶けた！」と驚く。手に付いた土粘土を落とした後、A児はタライの底を手を広げて探り、「粘土、無くなってる・・・」とつぶやく。



12月3日

C児とTがトンネルを掘っているところに、A児はシャベルを持ってやって来て「Aもやりたい」とTに言う。「Aくんもやりたいんだって」とTがC児に言うとC児は「いいよ」と答える。A児は穴に入ってトンネルを掘り始める。すると「壊れるから中に入らないで！」とC児が言う。それに対してA児

は「中に入らないと届かないんだよね」と言うと、C児は「壊してほしくないんだよね」と返す。A児の「・・・じゃあ、ここ(手前の穴)をもっと大きくしたら？」に対して、C児が「いいよ。先生も手伝って」と言うので、TはA児と一緒に穴を大きくする。C児が「これくらいでいいんじゃない？向こうからCちゃんが掘るから、Aくんはこっちから掘ってね」と言い、2人はしばらく掘っている。C児が「深くなってきたよ」と言うのに対してA児は「見せて」と見に行く。C児が「ここと向こうをつなげてトンネルにしたいんだよね」と言うと、A児は「分かった。Aは向こうからもっと掘るね」と返す。「トンネルができたなら、こっちの山に(線路を)つなげたいねん」とC児が話して指さす方を見ながらA児は聞いている。その後、D児も加わり、掘り続ける。片付けの時間になり、明日続きをしようと話しているところに他児が来て、トンネルを掘っている上を歩くと、少し崩れる。C児は「上を歩かないで。壊れるから」と言いながら穴を埋め始める。A児が「なんで、埋めるの？もう、やめるの？」と聞くと、C児は「違うよ。壊れるから」と答える。A児が「やり直すってこと？」と聞くと、C児は「そう」と答え、A児も一緒に崩れたトンネルの入り口を埋める。



「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える教師の援助と環境構成

- ・ 幼児が安心して遊び出せるように、教師がゆったりと寄り添う。
- ・ 幼児の思いを受けて、いつでも、何回でも遊びに取り組めるように、環境を整える。
- ・ 教師も一緒に遊びながら、幼児の思いを聞いてやりとりをする。
- ・ 友達と関わろうとする姿を見守ったり、教師と一緒に遊んだりしながら、友達とのやりとりの橋渡しをする。

「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える保育の中で育まれた姿

もっと遊びたいな

壊れるから、中に入らないで！

ここをもっと大きくしたら？

自分の思いを友達に話しながら遊ぶ姿

手袋になったよ

ここと向こうをつなげたいんだよ

向こうからもっと掘るね

繰り返し遊ぶ姿

感触を感じて遊ぶ姿

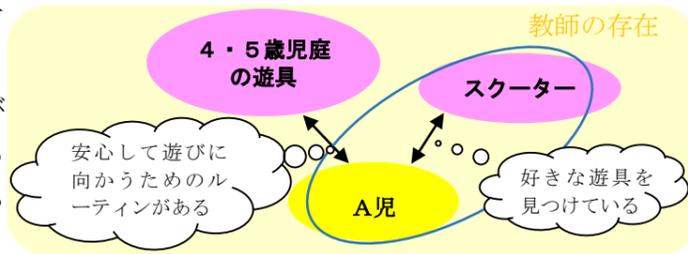
友達と一緒に遊ぶことを楽しむ姿

<考察>

A児が安心して教師に思いを話せるように関わり、遊びの場を整えてきたことで、A児が大好きな土粘土で繰り返し遊ぶ姿が見られた。その中には、感触を楽しむ姿から、ダイナミックに遊んだり何かに見立てて遊んだりする姿も見られるようになっていった。教師も一緒に遊びながら、幼児同士をつないでいくようにしたことで、A児が友達に自分の思いを話そうとする姿や、友達と一緒に遊ぶことを楽しむ姿が見られるようになってきた。一年間を通してA児は、素材に対してA児なりのいろいろな関わり方をするようになっていたり、友達と自分から関わろうとしたりする姿が育まれたと考えられる。

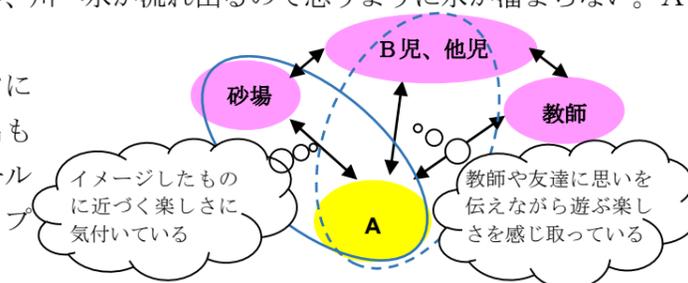
4月下旬

A児は、登園後、持ち物の始末や身支度を済ませると、園庭にあるスクーターに向かって走って行く。スクーターに乗ると、総合遊具のところへ行き、傍に停める。迷うことなく、はしごを登り、上段ロープを渡っていく。そこから降りると、スクーターに乗ってブランコの前へ行く。すでに他児がブランコで遊んでいると、A児はベンチに座り待つ。なかなか代わってもらえないと思うと、A児は「かーわって」と言う。他児に代わってもらえるが、3、4回揺られると、ブランコから降りてすぐにスクーターに乗り、やぐらへ向かう。やぐらに登り降りると、その後は築山に向かう。築山の上にスクーターを引っ張って登り、スクーターを押しながら走って下りる。そのまま園庭中をスクーターで走り、最後に砂場のところに行き、裸足になって遊び始める。A児は、4月下旬頃から、園庭に出ると、この順で4・5歳児庭の遊具で遊んでから好きな遊びに向かう姿が見られている。



5月17日

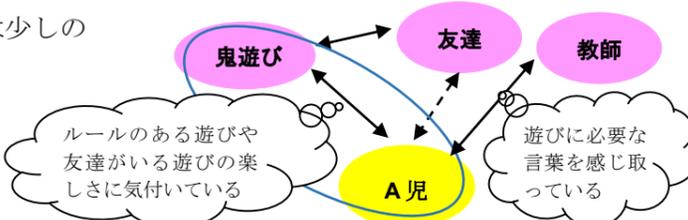
砂場でA児とTと一緒に穴を掘り始めると、B児が来る。B児がバケツを持つのを見ると、A児は掘るのをやめて「水入れよう」と言いながら、バケツを取りに行く。バケツで水を運んでくると、穴に入れ、A児も穴の中に入る。Tが「どうですか?」と聞くと、A児は「深い」と言う。その様子を見ていたB児も水を運んで来て穴に入れ、B児も入る。A、B児は水を運んだり、穴の中に入ったりすることを繰り返すことで、砂が崩れたところが細長く伸び、A児は川をイメージして「川になった。ここ掘ろう」とB児に言う。それを聞いたB児は、A児と一緒にまっすぐ掘り始める。その川に水が流れ出て長くなっていく。A児が川の先に穴を見つけ、「ここまでつなげよう」と、B児に言う。その後、A児はその穴をプールに見立て、穴に水を入れ始めるが、川へ水が流れ出るので思うように水が溜まらない。A児は「みんなのためのプールが全然できない。あそこ(川)から水が流れちゃうから」と、Tに言う。TがA児の手伝いを始めると、他児3名も砂場に来て裸足になり、水を入れ始める。プールに水が溜まるとA児は笑顔になり川を走ったりプールに入ったりする。



12月3日

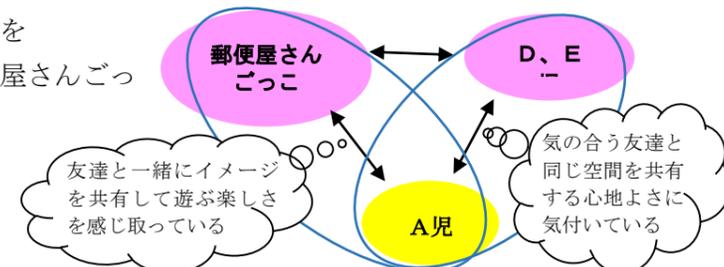
11月中旬より、好きな遊びの時間にTが戸外へ行くと、A児は「鬼ごっこしよう」と誘い、まずTと鬼遊びをする日が続いている。その日もTが戸外へ行くと、A児がTを誘う。Tはすでに鬼遊びをしているC児に、「何しているの?」と聞くと、C児は「氷鬼」と応える。A児に「氷鬼だって。Aくんも一緒にする?」と聞くと、A児は頷くが、Tの傍にいたので、Tは「Cくん『いれて』って言うの?」と聞くと、A児は「いれて」と言う。その氷鬼では、他に山組担任と幼児も遊んでおり、Tはその状況やルールが分かるようにA児へ伝える。A児は少しの間、様子を見てから遊び始める。

昼食後、A児は戸外へ走って出掛け、鬼遊びをしている山組担任に「いれて」と言い、遊び始める。



1月17日

3学期が始まり、A児はD、E児と一緒に同じキックライダーに乗り、園庭のいろいろな場所に出掛けている。A児が保育室に来て、Tに「郵便で一す。お金で一す」と手渡すふりをする。Tは「手紙も配達してくれますか?」と聞くと、A児は「年賀状ですね。ちょっと待ってください」と言い、作り始める。そこへ、D児が来たので、TはA児が年賀状をつくっていることを伝え、D児も作り始める。A児は作り終わると、手に持って出掛けようとするので、Tは「鞆はありますか?」と聞くと、「いる」と言う。それを見ていたD児が「Dもいる。赤いやつもある」と言う。Tが「ポスト?」と聞くと、頷く。そこへE児が来たので、A、D児の様子を伝え、E児も同じように作り、鞆を身に着ける。3名は年賀状を園庭にいるいろいろな友達に渡している。年賀状を見終わったらポストに入れてもらおうという郵便屋さんごっこ遊びが始まった。その後もA児は登園すると「9時20分に配達しまーす」と知らせ、D、E児と同じように鞆を肩から掛け、同じようにキックライダーに乗り、遊ぶ姿が見られる。



「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える教師の援助と環境構成

- ・ 新年度の新しい環境、遊具と対話をする時間を保障する。
- ・ 安心して遊びに向かったり、友達と関わったりするよう、その時期に体験してほしいとねらいをもった遊びに教師も参加し、一緒に遊ぶ。
- ・ 教師も一緒に遊びながら、遊びの状況や友達との関わり方、遊びに必要な言葉を知らせる。
- ・ 友達と共通のイメージがもてるように遊びの提案をする。また、友達と同じものを使ったり、身につけたりできるように、遊具や素材の環境を整える。

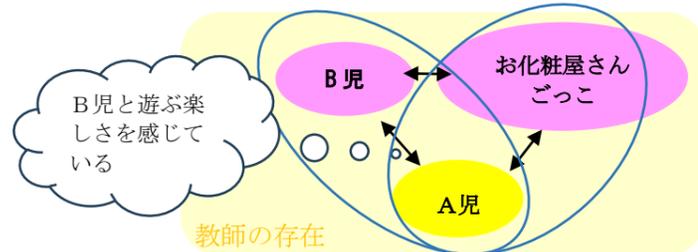
「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える保育の中で育まれた姿

<考察>

教師も一緒に遊びながら友達との関わりを支えたり、友達と共通のイメージをもてるように遊びの提案をしたりするなどの援助を積み重ねることで、A児は、たくさんの友達とルールのある遊びを楽しむ姿や、友達とイメージを共有しながら郵便屋さんごっこをする姿などが育まれたと考える。また、A児の姿を追う中では、「変わらないよさ」として、一人でも好きな遊びやしたい遊びに向かう姿、自分の気持ちを表現する姿を見取り、その姿を大切に支えることで、気の合う友達と一緒に遊ぶことを楽しむ姿へと変化・変容したと捉えた。

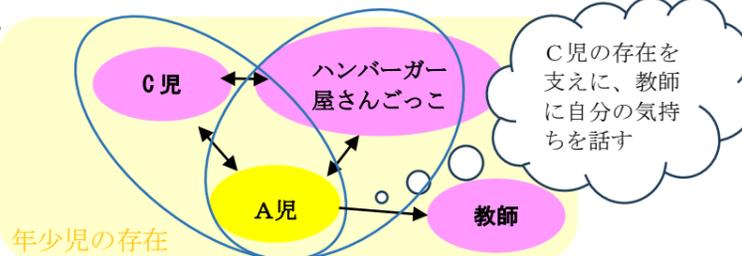
5月13日

クラスでプリンセスごっこをして遊ぶ幼児が多くおり、ままごとコーナーの調理器具を化粧道具に見立てて化粧をし、プリンセスになりきって遊ぶ姿が見られた。そこでTは、より化粧道具に近いものを、小さなポーチに入れて複数準備し、提示する。すると、お互いに向かい合ってお化粧屋さんごっこが始まった。A児は、B児が化粧道具で遊んでいる姿に興味深そうに見ている。それに気付いたB児は、A児に向かって、「お化粧屋さんしてるの」と話す。A児は「Aちゃんもやってみたい」と話す。B児は、「いいよ！ここに座って！」と自分の目の前に準備していた椅子を指して、座るように促す。A児は椅子に座り、B児に化粧をしてもらう。Tは二人の様子を見て「いいねー。可愛くなってきた？」と声を掛ける。B児は「はい！とっても素敵ですよ」と話す。それを聞いて嬉しそうに笑顔になるA児。A児の化粧が終わると、次はA児が化粧道具を持ち、B児に化粧をする。昼食の時間では、仲よく隣同士で弁当を食べるA児とB児の姿が見られた。

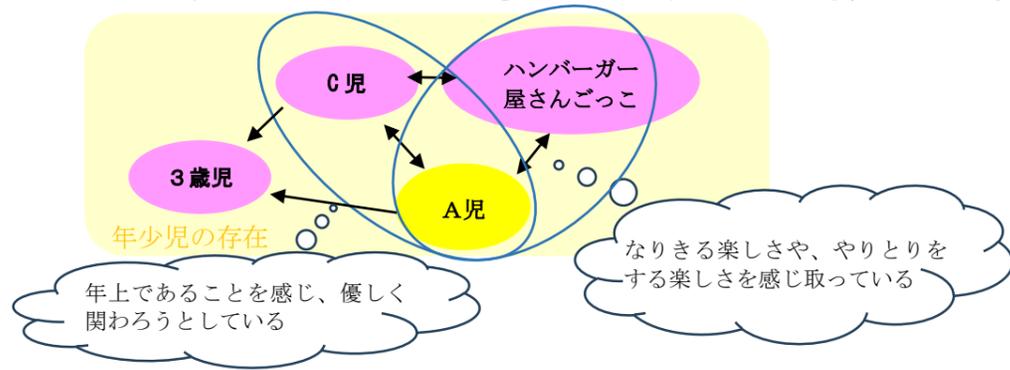


10月29日

A児は、C児と過ごすことが心地よいようで、よく一緒に遊ぶ姿が見られていた。10月に入ると、ハンバーガー屋さんごっこを楽しむようになっており、5歳児や3歳児に知らせに行き、お客さんになってもらい、やりとりを楽しんでいた。前日は、3歳児を誘ってごっこのやりとりを楽しんでいたが、遊び始めが遅かったので満足するまで遊びが楽しめなかったようであった。A、C児は、3歳児に「明日も来てね」と約束を交わしていた。昼食後、A、C児は、ハンバーガー屋さんごっこを楽しんでいた。この日も客足が少なく満足がいかないのか2人で顔を見合わせて話をした後、Tの元へやって来る。A児は、「先生、年少さんのところ行ってもいい？」と話す。Tは、「年少さんのところで何するの？」と尋ねる。2人は顔を見合わせしばらく考えた後、A児が、「ハンバーガー屋さんしに行きたい。昨日約束したから」と話す。A、C児の思いを受け、Tと一緒に3歳児担任の元へ向かう。3歳児担任はA、C児の思いを受け止め、3歳児保育室内にハンバーガー屋さんごっこの場所を設定する。



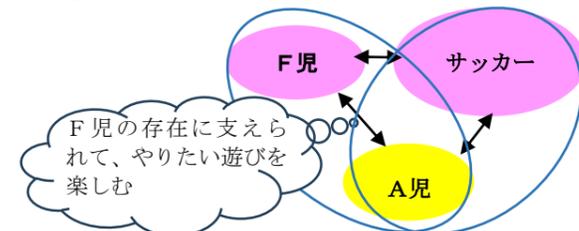
しばらくしてTがA児らの様子を見に行く。A児「いらっしゃいませー。チーズバーガーセットです」と優しく声を掛けながら、3歳児とのごっこのやりとりを楽しんでいた。降園前の振り返りの時間でA児は、「年少さんが、たくさんハンバーガー食べてくれて嬉しかった！」とクラスの幼児に伝える姿が見られた。



(前日までの姿) A児は、F児と気が合うようで、好きな遊びや昼食時など一緒に過ごす姿が見られていた。3学期になり、南庭でサッカーを楽しむ幼児がいる。TもD、E児らと一緒にサッカーを楽しんでいた。その姿を見たA児は、「Aちゃんもやりたい」と一緒にサッカーで遊ぶ。A児は、給食後も「サッカーで遊びたい」と気持ちを話したが、Tと一緒に遊ばないという声を掛けたり、遊びに入ったりすることは難しいようであった。

2月5日

A児は、「先生サッカーしよう」とTを誘いかける。Tは、「今別の遊びをしているから、一緒に遊ぶのは難しいかな」と伝える。A児はしばらく考えている様子だった。しばらくしてA児は、F児と一緒にD、E児に声を掛け、サッカーで遊び始めた。Tはその姿をしばらく見守ることにした。片付けの時間になり、Tは「Aちゃん、昨日と同じでサッカーで遊んだんだね」と声を掛ける。A児は、「Fちゃんと同じチームでね、DちゃんとEちゃんと戦ったの！」と満足そうに話した。



「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える教師の援助と環境構成

- ・ 幼児のやりたい遊びやイメージが実現するように、どうしたらよいのか一緒に考えたり、必要な道具や素材を準備したりする。
- ・ 他学年の教師と幼児の遊びについて話す機会を設け、共通理解を図る。
- ・ 幼児が楽しんでいる遊びを教師も一緒に楽しみ、遊びへの興味や関心が広がるようにする。
- ・ 振り返りの時間をしっかり設け、クラスの友達が互いに何を楽しんでいるのか知る機会を保障する。

「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える保育の中で育まれた姿

たくさん来てくれて嬉しかった！

年少さんのところでお店屋さんをしたい

遊びに満足する姿

自分の思いを相手に伝える姿

いらっしゃいませ！

なりきる楽しさを感じる姿

ハンバーガー屋さんです

友達とイメージを共有して遊ぶ姿

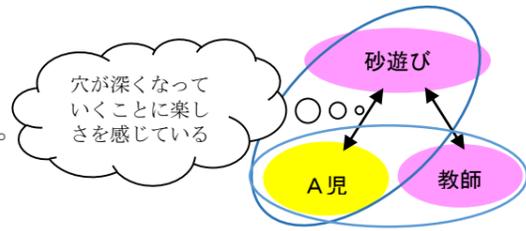
いろいろな遊びに向かう姿

<考察>

教師は、クラスの幼児の遊びを読み取り、遊びがもっとおもしろくなるように、適宜必要な素材や道具を準備するようにしてきた。A児は、クラスの幼児の遊びが広がると、友達が楽しそうに遊んでいる姿から遊びのよさを感じ取って、教師を支えにしていろいろな遊びに向かう姿につながったのではないかと考える。いろいろな遊びを通して、なりきることの楽しさを感じたり、イメージを共有して遊んだりする姿へと変化・変容していると考察する。また、遊びの中で気の合う友達と出会い、友達の存在に支えられて、自分の思いを相手に伝えたり、自分からいろいろな遊びに向かったりする姿へと変化・変容していったと考察する。

5月14日

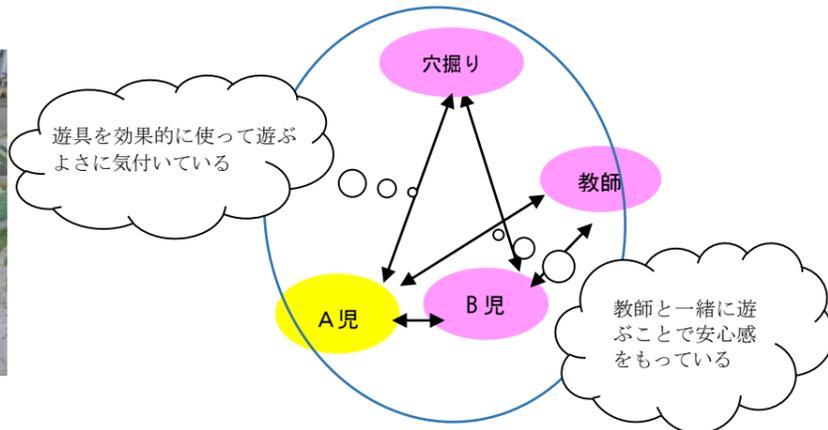
朝、いつものようにA児が砂場で遊んでいた。A児が砂場から「先生、ちょっと来て。ちょっと手伝って。今な、僕な、穴掘ってる」と言った。Tと二人で穴を掘っていると、A児は「いっぱい掘れてきたなあ」と、穴が深くなっていくことにおもしろさを感じているように言った。しばらく掘り進めると「先生もっと頑張ってる」と言うので、「頑張ってるけど頑張るってどういうこと?」と尋ねると、「あの子、言うで。それはこう。こうやってな、こうすると頑張ってるっていうねん」と言った。そしてA児はシャベルを砂にグッと差し込み、シャベルいっぱい砂を盛って、重さでグラグラするシャベルを両手で押さえ持ち「こう、こんな感じ。これを頑張ってるっていうねん」と得意気に言った。



9月24日

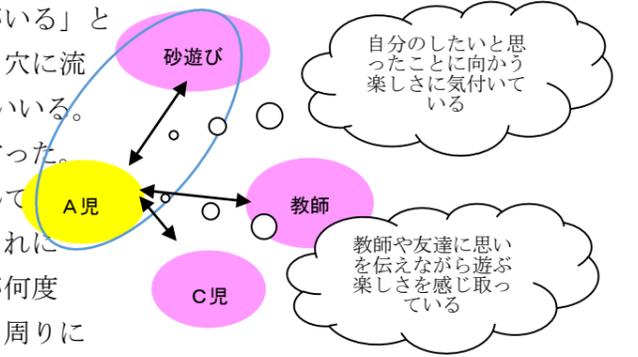
4月に園にやってきた子ウサギが大きくなったので、幼児が触れ合いやすいように、それまで飼っていたケージから栗の木の下にサークルを、ウサギの過ごす場を移した。9月の終わりの頃だったが、まだまだ暑く、外で過ごすウサギの体調を心配した。そこでTは、穴掘りが好きなA児を誘ってウサギが暑さを凌げる穴を掘ろうと思った。

A児が登園してきてTの姿を見つけ「先生何してるん?」と言うので、ウサギの穴について話するとA児は「やる、やろう。僕がやるわ」とスコップを持ってきて、掘り出した。そこにB児がきて、A児に「何してるの?」と聞いた。「フワフワちゃん(ウサギ)が暑いから穴掘ってる。Bちゃんも手伝って」とA児は言った。ウサギが好きなB児は「私もする。私もするね」と言って、走ってスコップを取りに行き、一緒に穴を掘り始めた。三人で穴を掘って掻き出し積み上げた土に、B児が「ここにこんなに貯まっちゃう」と困ったようにスコップで土を叩いた。するとA児が「僕にいい考えがある。ちょっとまっとな」と言ってサークルから出ていき、三輪車の後ろに四輪トロッコをつなげ、その中にバケツを積んできた。そしてサークル内のB児にバケツを渡し、「これに土を入れて僕に渡して。僕が捨ててくる」と言った。B児とTで掘り出し貯まった土をバケツに入れてサークルから出すと、A児はそれを四輪トロッコに乗せ、ガラガラと音を立てて三輪車で引き、以前、Tと園庭の水たまりの穴埋めをした場所へ行き、そこへ土を降ろした。



10月13日

A児が砂場から「先生来て。見て。すごい穴が掘れた」と大きな声で言った。その言葉に、そこにいた他児が、A児の掘った穴に集まり、中を覗いてみたり、自分のシャベルを差し込んで深さを確かめてみたりする。傍にいたC児が「もっと大きくしたらいいのに」とA児に言うと、A児はTに向かって「先生あの子、僕はこれ(穴)をもっと大きくこーれくらいにしようと思ってる」と言いながら小走りで砂場の端まで行き、目印を付けるように、持っていたシャベルを砂に差した。そして「先生もCちゃんも手伝って」と言い、穴を広げるように掘り出した。C児も「えっさ、えっさ」と言いながらA児の横で掘っていった。穴が広がるとA児は「よっしゃ。もうこれでいい。次は水がいる」といってバケツに水を汲んできて、勢いよくザーッと穴に流し込んだ。「Cちゃんも水とってきて。水がいっぱいいい。なんでか言おうか。なぜならここは海やから」と言った。C児がペットボトルに水を入れ、両手に持って運んでくると、A児は「あかん、そんなんでは足りひん。これに入れてきて」とC児にバケツを渡した。A、C児が何度も水を運び、ザーザーと勢いよく流し入れる姿に、周りにいた幼児もそれをおもしろそうに感じたのか、一緒になって水を流し込み、大きな海ができた。



「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える教師の援助と環境構成

- ・ 幼児が好きな遊びを教師も一緒に楽しみ、安心感をもって遊びに取り組めるようにする。
- ・ 自分の思いを言葉で伝えながら遊ぶ姿を見守る。
- ・ 「～したい」と思うことができるまで、教師も一緒に遊びながら援助する。

「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える保育の中で育まれた姿

砂や水の感触を十分に楽しむ姿

思いやイメージしたことを教師や友達に伝える姿

道具を効果的に使って遊ぶ姿

遊びの中で気付いたことや、できるようになったことを使い、考えたり、試したりする姿

<考察>

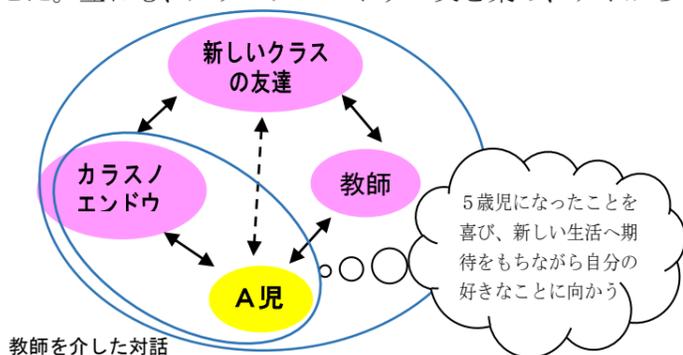
A児は4月当初、登園時になかなか保護者と離れられずにいた。教師はA児の好きな砂場に誘い、砂と対話する時間や、教師と一緒に過ごす時間を積み重ねた。そうすることでA児は、好きな遊びを通して友達と関わり、自分の思いを出しながら遊びに取り組んだり、イメージしたものをつくらうとしたりして、自分なりの遊びの世界を広げていく姿に変化・変容していったと捉える。

4月23日、24日



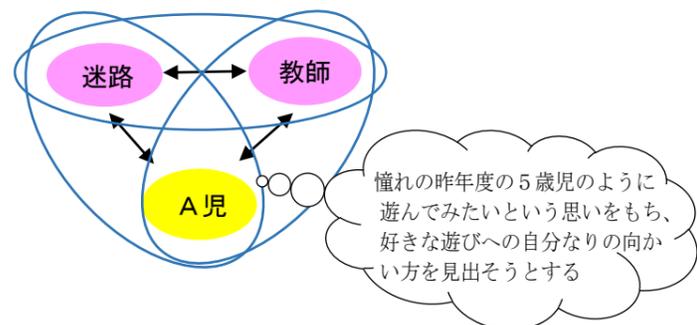
進級当初より、4歳児の頃から仲がよかった友達と一緒に遊びながら、自分の近くで同じように遊ぶクラスの子の様子を感じたり、気にしたりする姿が見取れた。降園前のひと時では、友達の遊びの紹介に興味をもち、Tを介して質問したり、Tに友達の話を聞いて思ったことについて話したりする姿が見られた。23日、クラスの友達がカラスノエンドウの実を集めて喜んでいて、その驚きや喜びをTに知らせる友達の様子をA児は傍で見て、「Aもこれ知ってる。Aも集めてみるわ!」とTに話し、友達やTと一緒にカラスノエンドウを集めて遊んだ。降園前のひと時では、集めたカラスノエンドウの実を見せながら、集めた場所や実の様子を知らせ、「カラスノエンドウ」という名前のおもしろさに気付いたことを知らせた。翌日も、カラスノエンドウの実を集め、サヤからマメが飛び出しているものを見つけると、「これ見て!今日は、こんな見つけた。ほら、マメが出て。外に出たかったんっちゃ?」と保育室にいたTに知らせに来た。Tや、そのやりとりの様子を近くで見ていた友達が、A児の発見に驚いたり、興味をもったりした反応を喜び、そのカラスノエンドウを大事に持ちながら乗り物に乗り、再びカラスノエンドウの実を探しに行った。

教師を介した対話



4月30日～

月刊絵本の後ろにある迷路をつなげて遊ぶ幼児の姿が見られた。Tは、大きな素材や新しい道具との出会い、新しいクラスの友達と思いや考えを出し合いながら一緒に遊ぶことを願い、「迷路」をクラスの遊びに取り入れてみたいと考えた。幼児とのやりとりの中で、それぞれの幼児の「迷路」に対するイメージを探っていると、A児が、昨年度の5歳児の遊びである「おぼけ迷路」を思い出し、自分たちもやってみたいと話した。Tが「どんな迷路にしようか?」と尋ねると、A児は「ちょっと難しいねん」と答えた。Tは、やりとりを通して、「幼稚園中を迷路にしたい」というA児の思いを知り、Tもおもしろそうだと感じたこと、一緒にやってみたいということをA児に伝えた。また、A児自身が、自分の思いを実現させていく遊びのイメージがまだ具体的ではないのかもしれない、特に、遊び始めへの戸惑いが、「難しい」という表現につながったのではないかとTは考え、「材料探しをする」か「どのような迷路にしたいと考えているか描いてみる」のどちらかの方法で遊び始めてはどうかと提案した。A児は、「まず、描くわ!それはできる」と答えた。Tは、友達と一緒に遊んでいく様子を支援していきたいという思いから、「どんな迷路にしたいか描いたら、一緒に遊ぶ友達にも分かりやすくしてほしい」とA児に伝えると、「そうやな。星組の迷路やし、みんなで作らなあかんから」と話した。迷路の遊びに興味をもった友達も一緒に「迷路の設計図」を描いた。降園前のひと時では、「迷路の設計図」を友達に見せながら、「こんな星組の迷路をつくりたい」と話した。



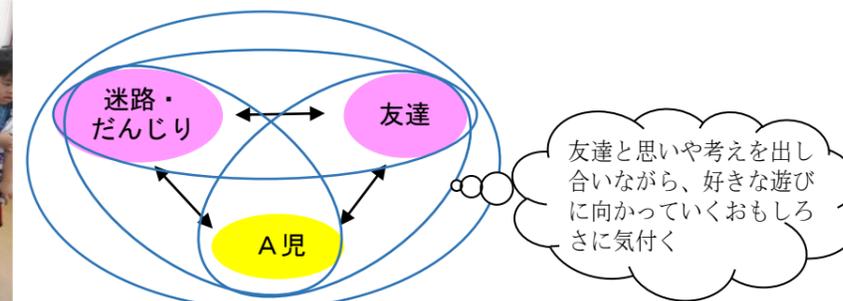
憧れの昨年度の5歳児のように遊んでみたいという思いをもち、好きな遊びへの自分なりの向かい方を見出そうとする

5月1日～

迷路遊びに興味をもった幼児らが、素材や道具に自分なりに触れながら、それぞれが自分のやってみようことに向かって遊ぶ姿が見られた。A児も描いた設計図をもとに遊び始めるが、「迷路づくりの仲間がいっぱいいないとできない」とTに話した。Tは、一緒に好きな遊びに向かっていくことのできる友達の存在をA児は求めていると捉え、友達の姿をA児に知らせたり、A児が遊びを展開していくことでいろいろな友達との関わりが生まれることを願って支えたりした。次第に、Tの直接的な援助がなくても、迷路遊びで関わった特定の友達と一緒に、継続して遊びを楽しむ姿が見られるようになった。

7月1日～

だんじりが好きなA児は、地域で祭りの雰囲気を感じられ始めると、だんじりづくりをして遊び始めた。A児は、自分の体験や知識をTに知らせることが多かったが、一緒に遊ぼうとする友達にもTがつながるようにした。A児は、新たに一緒に遊んでみたいという友達に、遊びの様子や手伝ってほしいことを伝えたりして、一緒に遊ぶことを喜ぶ姿が見られた。また、いろいろな友達が思いやアイデアを出し合う中でも、A児がしたいことや考えていることを自分の言葉で友達に伝えようとする姿が見られた。段ボールで囲われた空間に、扉や窓があると外が見えてももっとよくなりそうだという友達のアイデアに賛同し、一緒につくることを楽しむと、次はその空間にお雛子のための楽器を備え付けた。友達のアイデアを受けて、さらに自分のやってみようことやおもしろくなりそうなることを見出し、自分たちのだんじりづくりを楽しんだ。



「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える教師の援助と環境構成

- まずは、幼児が自分の好きなものや興味をもったものに対して、じっくりと対話ができるよう支える。
- 幼児自身が、自分の思いやイメージを具体的にしていったり、自分で遊びの方向性を明確にしていくことができたりするような教師との丁寧な対話の機会を設ける。
- 遊びの中での友達との関わりを支えながら、関係性の中での個々の姿を支える。

「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える保育の中で育まれた姿



これまでの体験をもとにしながら自分たちの遊びをつくり出す姿

大勢の友達と一緒に楽しさやおもしろさを共有する姿



自分なりの目標をもって繰り返し挑戦する姿

<考察>

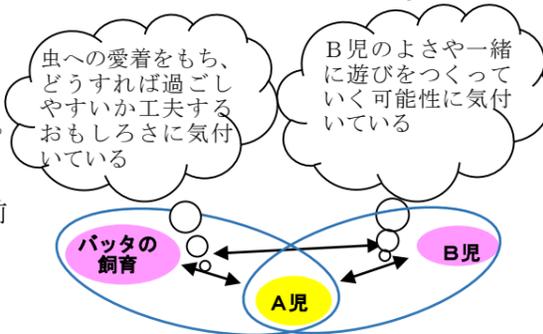
A児自身が自分の好きなことに向かう中で、A児の周りのものや人(教師やいろいろな友達)との対話を丁寧に積み重ねていくことができるように援助してきた。関わりの中でのA児を支えることで、友達との関わりが広がったり、楽しさやおもしろさを共有しながら友達と一緒に遊びを楽しむ姿が見られたりするようになった。また、関わりが深まると、友達と一緒に、新しい取り組みに向かったり、繰り返し挑戦しようとする姿につながったと考えられ、友達との関わりの中で「自分のよさや可能性に気付く」A児の姿が捉えられた。

6月3日

A児は、B児と一緒に飼育小屋の近くで虫を探していた。2人は、小さなバッタをたくさん捕まえると、保育室に知らせに戻ってきた。A児は、「バッタのエサがいると思う」とTに伝えたので、Tは「図鑑もあるよ」と伝えた。2人は図鑑で調べてみることにした。図鑑にはエノコロ草を食べると書いてあったが、見つけれずに戻ってくる。A児は、「捕まえたところの草をあげたら食べると思う」と話し、草を選び始める。様々な種類の草があり、A児は「全部1本ずつあげてみて、どれを食べるか見たいよ！」と話し、1種類ずつ入れてみることにした。A児は降園前の振り返りの時間にクラスの友達に今日のことを伝えた。その後、2人は世話をし続け、バッタは脱皮して大きくなっていった。

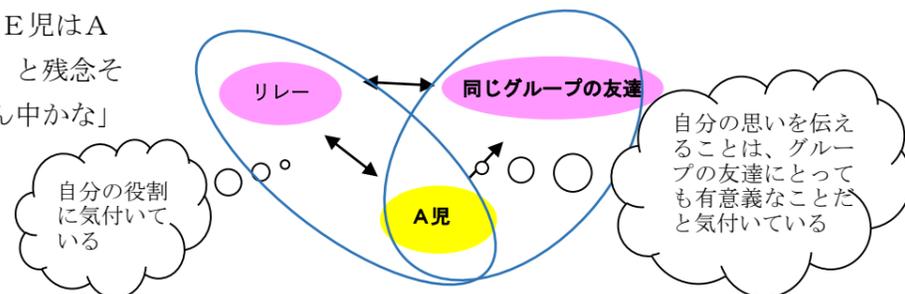
(終業式の日を振り返りにて)

1学期を振り返り、どのような遊びをしてきたかを伝え合っていると、A児が「僕は毎日バッタの研究所をしたよ。どうしてバッタの研究所始めたか、先生知ってる？」と話し始めた。Tが「分からないわ。教えて」と応えると、「前にBくんがダンゴムシの研究所してたよね。Bくんと僕なら、バッタの研究所もできると思ったんだ」と話した。



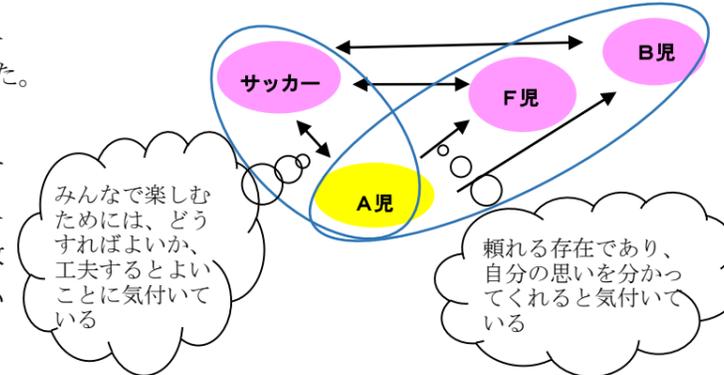
10月上旬

運動会の遊びの中で、リレーの遊びを楽しんでいた。クラスを2グループに分けて、星組と競って遊ぶようになった。降園前の振り返りの時間に、「星組の最後は足が速い子だから、空組も足の速い子がアンカーをした方がいいと思う」という話になった。その話し合いの中で、A児は「僕、結構足速いよ！」と声をあげた。他の幼児も、「私も！」と話し、アンカーをしたい様子であった。それを見ていたC児が「前に外で、動物と競争して(体力測定)走ったやん？あの時誰が速かった？Dちゃんやん！」と話した。Tは、「その時は、Dちゃんが速かったかもしれないけど、最近みんなリレーでたくさん遊んでいるから、今かけっこしたらどうなるかな？分からないよ！」と話した。D児は、A児と同じグループだった。次の日のリレーもアンカーを代わりながら遊んでいたが、D児がアンカーをすることが多く、A児がグループの友達にアンカーをしたいと言うことはなかった。運動会が近づいてきたため、運動会当日の順番を決めることになった。TはA児に「Aくんもアンカーしたいんじゃない？」と声を掛けた。すると、A児は「僕も結構走るの速いからアンカーできると思う」と話した。それを聞いていた同じグループの幼児が集まり、「じゃあ、アンカーしたい子で走って、1番の子がアンカーになろう！」ということになった。グループで園庭に出て、競争をし、足が速かった数名でもう一度勝負をすることになった。何度も競争をしたが、やはり1着はD児だった。見ていたC児が「何回もしたけど、Dちゃんが速かったよ。2番がAくん」と伝えると、一緒に走っていたE児が「じゃあ、次はじゃんけんで決めようよ」と声を掛けた。それまで、A児は黙って話を聞いていたが、E児に対して「リレーで強いのはじゃんけんが強い子じゃない。かけっこが強い子だよ。だから僕は後ろから2番目にするわ」と伝えた。E児はA児の言葉を聞き、「そうかあ」と残念そうに答え、「じゃあ僕は、真ん中かな」と話した。



11月29日、12月2日

降園前の振り返りの時間に、F児が「サッカーをして楽しかった」と話した。それを聞いたA児は「僕も一緒にしたよ。楽しかったけど、負けてしまった」と伝えた。Tが「どうして負けたの？」と尋ねると、「赤チームはいつも強い」と答えた。「本当は人数を一緒にしたい。だけど、Fくんが強いからFくんのいるチームへ友達が行ってしまう。でも、そうしたら、おもしろくないから今日は白にしたよ。そしたら負ける」と話した。翌日、A児は「赤と白、同じ人数にしようよ！」と伝えるが、なかなか応じてもらえず、A児はF児のいる、人数の多い赤チームに入って遊ぶことにした。赤チームばかり点数が入っていくので、F児が「僕、白にするわ」とA児に伝えた。A児は、「じゃあ僕も」と一緒に白チームに入った。赤チームの方が、人数が多く得点が高かった。ゴールが決まると、白チームのB児が「赤チーム5点になった！」とA児に伝えた。するとA児は悔しそうな表情で「なんで赤ばかり点数入るか分かる？人数が多いからやで！」と強い口調で話した。



「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える教師の援助と環境構成

- ・ 幼児の興味、関心が広げられるように、すぐに調べることができるよう図鑑などすぐに手に取れるようにしておく
- ・ 自分の思いや考えを試すことができるよう、じっくりと対象と対話する時間と空間を保障する
- ・ 振り返りを通して、それぞれの思いや遊びを知る機会や自分の思いを伝える場をもつ。
- ・ 幼児の思いを尊重し、遊びを委ねる。

「自分のよさや可能性に気付く姿」を支える保育の中で育まれた姿

友達のよさに気付く姿



Bくんとならできると思ったよ

僕も結構速いよ！Dちゃんもすごいね

チームの人数を一緒にして遊ぶとおもしろいね

試行錯誤する姿

どの草を食べるかな？1種類ずつ、入れてみようよ！

リレーで強いのは、足の速い子だよ。だから、僕は後ろから2番目！

集団の中での「自分の役割」に気付く姿



<考察>

進級当初は、慣れ親しんだ友達と過ごすことが多く、安定した関係があるからこそ自分の思いを伝えたり、相手の思いに気付いたりする姿があった。じっくりと対象と対話する環境の保障や、友達の姿を知る機会をもつことで、次第に新しい友達が何に興味をもっているかを捉えていき「共通の目的をもって友達と遊ぶ楽しさ」に気付いている。友達の思いを尊重しようとする姿や、やりたい遊びによって一緒に過ごす友達を考えていることから、「友達のよさ」にも気付いていると捉えた。また試行錯誤する力では、遊びを通して自分の遊びだけでなく、どう工夫すれば「みんなが楽しくなるのか」を考える姿があった。自分の思いが膨らむと、今までの経験から自分の思いが伝わると信じ伝えに行く姿から「友達のよさ」に気づき、集団の中での「自分の役割」を意識する姿が、A児の変化・変容だと捉えた。

「研究テーマを意識した取り組みを」

大阪教育大学 健康安全教育系 教員養成課程 家政教育部門
小崎 恭弘

研究のテーマは、さまざまな意味を持ちます。大阪教育大学附属幼稚園が目指す保育のあり方であり、また同時に現代の子どもや幼稚園教育が置かれている社会からの眼差しへの、一つの答えであると感じています。研究テーマの変遷は、幼稚園の保育の歩みの軌跡であると言えます。

今回の研究テーマは「自分のよさや可能性に気付く保育の在り方を探る」と言うものです。前提として「よさ」があり、子どもの全てを肯定的に、そしてありのまま受け止める姿勢を持つことを意識しています。また子ども達一人ひとりがそのことに対して、自ら気付いていくという「主体」としての視点を大切にしました。これらは子どもの変化に対して、教師が意図的にとらえ関わることで、初めて気付き見つけられるものです。保育の営みは子どもからするとある意味「無自覚的」なものであり、自らのよさや成長に対して気がつきにくいものです。だからこそ教師が、その子ども達のよさや成長に対して、敏感にそして適切に捉え関わり、子ども自身を発見していく必要があります。

そのためには幼稚園の友達が存在が欠かせません。子ども達の気付きは他者との関わりの中で初めてなされるものです。自分とは違う他者の存在が、自己をより際立たせ、そこに自分の存在やよさに気付くのです。そのための環境構成や支援のあり方が、教師の専門性なのです。

今回の研究会において、教師の丁寧な環境構成のあり方、そして子ども同士が繋がれるような適切な関わりが随所に見られました。テーマの意味を深く理解し、意識した保育の在り方の中で、子ども達の「よさ・可能性」が大きく育まれていました。3年間の積み重ねの成果が存分に発揮されていました。今年で研究テーマは一つの区切りを迎えますが、更なる発展を期待しています。

「幼児の「こだわり」の世界を大切にする」

大阪教育大学 総合教育系 初等教育課程 初等教育部門
中橋 美穂

附属幼稚園では、「自分のよさや可能性に気付く保育の在り方を探る」というテーマで3年間の研究に取り組んでこられました。幼稚園教育要領解説(2018)には、幼児が自分のよさに気付き自己を形成していくには、ありのままの自分が認められているという安心感や、日々の遊びや生活の中でその幼児なりのよさを捉える教師のまなざしに支えられることだと述べられています。特に3歳児には、4・5歳児とは異なった一人一人のこだわりの世界があります。例えば、大好きな青色のスクーターでずっと走っている幼児や、決まって赤色の小さいシャベルで緑色のバケツに砂を入れて遊んでいる幼児などです。いつもの色の遊具がないと遊びを始めないこともあり、幼児によっては2学期を過ぎてもその「こだわり」が続くこともあります。ところが一見すると同じ青色のスクーターで走る遊びを繰り返しているようでも、スクーターで遊んでいる周りの幼児の様子をみながら、友達を意識して同じスピードで走ってみようとしたり、並んで一緒にスタートをしてみようとしたりする様子が観察されます。自分の「こだわり」の世界に、同じように身体を動かして遊ぶ仲間存在に気付き、新しい楽しさを感じ始めるのです。教師にはこうした幼児の思いを丁寧に受け止め、そこに応じた援助をすることが求められます。

日々の保育の中で、幼児が「自分のよさや可能性」に気付いていく過程とは、自分の好きなことに夢中になるなかで、幼児自身が周りにある環境や人々について気付き、考え、自己決定していくことです。教師が一人一人の「こだわり」の世界に寄り添う保育実践を積み重ねることで、その子らしさの輝く姿にあふれる幼稚園生活が営まれることにつながるのでしょう。

「仲間とのめりこむ」

大阪教育大学 総合教育系 初等教育課程 初等教育部門
柳岡 開地

今年度は、「自分のよさや可能性に気付くための保育のあり方を探る」というテーマの最終年度ですが、私自身ははじめて4歳児を担当させていただきました。とても印象的だったのは、仲間と一緒にのめり込むという姿でした。たとえば、私が観察していた2人の子どもは、なんと1時間ほどコマ回しに勤しんでいました。面白いのは、本人たちなりにどうやったら回るのかを様々工夫をしているのですが、コマがほとんど回らないということです。本当に何度もトライしているのですが、一向にまわりません。大人ならYouTubeで正解を見たり、諦めてしまったりしているところでしょう。しかし、2人の表情は落ち込むどころか、非常に生き生きしているのです。2人が待ち望んでいる瞬間は、ふとした時に訪れます。紐を引っ張った勢いで一瞬だけ回る時があり、2人はその瞬間を見逃しません。すると、「～をしたからよかった」「もっと～すればよいんじゃないか」と言って、また回し始めるのです。この繰り返しです。正しいひもの巻き方や回し方はわからないけれども、自分たちが工夫を凝らせばいつか回るんじゃないかという心持はまさに自分たちの可能性を信じている姿ではないでしょうか。つい周りの大人は正解を教えたくるのですが、正解がわからないなかのめり込めるのは、楽しいという感覚と同時に自分自身の可能性を信じている証拠だと思います。また、重要なのは自分自身の可能性を信じるためには、一人では不十分で、一緒にのめり込んでくれる仲間が必要だという点です。一人だと自信がなくなって諦めてしまうけれども、友達とならいつか回れるかもしれない。そういった意味では、自分「たち」の可能性と言っても良いかもしれません。自分自身が手応えを感じながらのめり込める遊びや活動、そして一緒にのめり込める仲間がいて、はじめて自分のよさや可能性に気付くことができるのだと思います。

3年間の研究を終えて

「よさ」「可能性」と「やる気」

大阪教育大学附属幼稚園長 小松 孝至

「自分のよさや可能性」をめぐる3年間の研究をまとめる議論の中で、この「よさ」と「可能性」とは、私が専門とする心理学で、「動機づけ」という概念で扱われる内容にかかわることだったのではないかと考えました。

心理学の講義では動機づけを、やる気が出たり出なかったりするプロセスの研究、などと説明することがあります(厳密な定義を考えるといろいろ難しいのですが)。さまざまな研究がありますが、その中で強調されることのひとつに、報酬や罰など他者からの働きかけで生じるやる気の問題点があります。報酬があるから何かをする、というのは、職業には多かれ少なかれあてはまることで、普通のことに思えます。しかし、子どもたちの学びを考えたとき、「ごほうびがもらえるから」とか「それをしないと怒られるから」という、他人の意向による「やる気」だけが幅を利かせてしまうと、「自分は何をしたいのか」「自分は本当にこれがしたいのか」がわからなくなり、しっかりした自分づくりのための学びができなくなってしまいます。

そうならないためにどうしたらいいのか、心理学の議論から考えても、おそらくその手がかりの一つになるのが、さまざまなことに取り組む中で「よさ」や「可能性」を感じ取ることといえそうです。私たちはそれらを感じることは、他人からの働きかけと関係なく、積極的に取り組むからです。幼児期にそうした経験を積み重ねることは、自分づくりの土台といえるでしょう。一方、難しいのは、どんな場面で何をしているときによさや可能性を感じるかは個々の子どもによって違うこと、また、その経験は周囲が直接与えられるものではないことです。そして、私たち大人が、そうしたよさと可能性に基づくやる気を感じているかも問われるように思います。